茶室「瑞暉亭」建設の経緯

川　島　洋　一*

On the Donative Circumstances of "Zui-ki-tei"

Yoichi Kawashima

Zui-ki-tei, the Japanese tea-ceremony house donated by Ginjiro Fujiwara (1869-1960) to Sweden, was built at The Museum of Ethnography in Stockholm in 1935. In the academic article in 2004, the author has already showed the donative circumstances of Zui-ki-tei and also illustrated the decisive role of Ida Trotzig (1864-1943) throughout the whole process of donation and construction of Zui-ki-tei. Most of the source material treated herein are derived from the newly found literature which describes the detailed construction process of Zui-ki-tei. The precise circumstances of donation and construction of Zui-ki-tei are reviewed in this paper.

1．はじめに

かつて日本からスウェーデンに寄贈された「瑞暉亭（ずいきてい）」という茶室と、グンナール・アスプルンド（Erik Gunnar Asplund, 1885-1940）やアルヴァ・アールト（Alvar Aalto, 1898-1976）ら北欧の建築家との関係について、筆者は2004年に小論を発表した[1]。この茶室は1935年にストックホルムにある国立民族学博物館の敷地内に建てられ、同国における茶道の普及に貢献するとともに、アスプルンドをはじめとする建築家たちにも親しまれたが、1969年に不審火により焼失したことから、今日ではその建築的な詳細を知ることが困難になっている。瑞暉亭の建設の経緯については熊倉功夫による『近代茶道史の研究』に記述があり、茶道史ではすでに存在が知られていたものの、そこでも詳細は不明であった[2]。筆者はスウェーデンの建築雑誌「ビグメスタレン（Byggmästaren）」に掲載された建設当時の瑞暉亭を紹介する記事を発見し、2004年の小論では図面や写真を含むその記事の情報を用いて失われた瑞暉亭の姿を復元すると同時に、別の資料も用いてその寄贈と建設の経緯を明らかにした。

その後、建築家今井兼次が設計した「多摩帝國美術學校」を紹介する日本の雑誌のゲラ刷りのなかに、瑞暉亭に関する当時の記事があることを今井のご子息である今井兼介氏よりご教示いただき、コピーの提供を受けた。さらに同氏からは、その記事が雑誌「建築世界」のものではないかというご示唆をいただき、さっそく調査した結果、たしかに雑誌「建築世界」第30巻、第1号（1936年）の記事「茶室 瑞暉亭」であることを確認した[3]。

本稿は、上述した「建築世界」誌に掲載された記事「茶室 瑞暉亭」を紹介すると同時に、そこから読み取れる同茶室に関する事実関係を報告し、それにより2004年の小論の内容を更新して、同茶室の寄贈と建設の経緯をより詳細かつ正確に整理して示すことを目的とする[4]。

＊ 建設工学科　建築学専攻

2．茶室「瑞暉亭」建設の経緯

そもそも日本の茶室がスウェーデンに贈られる契機となったのは、来日し表千家で茶を学んだスウェーデン人女性イーダ・トローツィ（Ida Trotzig, 1864-1943）の発案によるものであった。イーダについては熊倉の前掲書中にも発案者としての記載があるが、「茶室 瑞暉亭」では「一九三四年の末に及び漸く茶席待合庭等の仕様書が出来上つたので（中略）嘗て神戸に永年在住して茶の湯を學び、その著書すら出して居るイダ トユッチヒ夫人の喜びは異常なものであつたそうだ」[5]という記述があるものの、これ以上の表現は見当たらない。実はイーダの立場についての事情は、スウェーデン児童文学の翻訳者として知られる小野寺百合子の著書『バルト海のほとりの人びと』に記載されている[6]。小野寺はスウェーデン在住中に晩年のイーダと親交があり、本人から直接聞き取ったイーダの生涯と瑞暉亭建設の経緯をくわしく紹介している。ここではそれぞれの資料を突き合わせ、事実関係を明らかにしていきたい[7]。

イーダの夫ヘルマン・トローツィ（Herman Trotzig, 1832-1919）は、船員として1859年に長崎に到着し、そのまま日本に留まった。アーノルド・グルームやグラバー商会などに勤務し、1868年には居住地を長崎から神戸に移した後、神戸居留地行事局長や神戸居留地警察署長を歴任した。スウェーデンに一時帰国した際に32才年下になるイーダと結婚し、ドイツ滞在を経て夫婦で再び日本に旅立ったのが1888年とされる。ヘルマンは1899 年に国内のすべての居留地が日本に返還されたのを期に職を引退したが、その後も神戸に住み続け1919年に日本で生涯を終えたという[8]。夫ヘルマンとともに来日したイーダは、その後30年以上居住した日本で日本語や日本文化を学び、特に茶道と華道を本格的に学んだ。1911年には、上の引用文中にも記述が見られる茶の湯をスウェーデンに紹介する著書『Cha-no-yu, Japanernas teaceremoni』をストックホルムで出版した[9]。ちなみに同書の序文は、探検家であり親日家としても知られるスヴェン・ヘディン（Sven Hedin, 1865-1952）が書いており、当時スウェーデンでは無名であったイーダが著書を出すにあたり力添えをしたことが想像される。

ヘルマンの没後ストックホルムに戻ったイーダは、スウェーデンに本格的に茶道を紹介するために茶室を必要とした[10]。彼女は当時、同国イェーテボリにある貿易会社に協力して緑茶の輸入に携わっていたが、その会社の経営者であるヤーメス・ルンドグレン（James Lundgren）に茶室のための出資を依頼する一方で、スヴェン・ヘディンの弟子でありストックホルムの民族学博物館館長であったG.リンドブロム博士（G. Lindblom）に茶室の建設を嘆願した[11]。同博士はパリ大学のエリセーエフ教授に相談し、1932年に日本から茶室を寄贈してもらう計画を立てた[12]。リンドブロム博士は、駐スウェーデン日本公使を通して国際連盟日本支部に茶室の寄贈を正式に要請したところ[13]、それを知った当時の日瑞協会副会長で王子製紙社長の藤原銀次郎（茶名　藤原暁雲, 1869-1960）が中心となって寄付の会がつくられたという[14]。藤原は北欧の気候に向く茶室を探したが適切なものを見つけることができず、結局新しい茶室を建築することにした[15]。茶室の設計者について熊倉は山澄力蔵とし、棟梁が浮ヶ谷氏、大工が谷口氏としているが[16]、「茶室 瑞暉亭」では「藤原は東京の骨董商山住氏の推薦に依り技術・経験・人格を兼ねそなへたる数寄屋匠浮賀谷徳三郎氏にその設計萬端を依頼したのである」としている[17]。熊倉のいう山澄力蔵と骨董商の山住氏とは同一人物である可能性が高いが、実際に彼が設計を行ったかどうかはこれだけの情報では判断できない。ただし、ここから先の茶室の建設の経緯について「茶室 瑞暉亭」の記述は細部にまで及んでおり、信用性が高いと考えられる。「茶室 瑞暉亭」に記されているように棟梁の浮賀谷徳三郎が数寄屋師であったならば、設計も手がけた可能性があるだろう。先に引用したように、1934年末に茶席待合庭などの仕様書

が完成し、スウェーデン側の関係者に公表したという[18]。

さらに茶室の建設の経緯について、「茶室 瑞暉亭」から引用してみたい。

一九三五年の三月初旬この茶室は浮賀谷氏の設計に依りストックホルムに建設すると寸分も違はぬ様にして假り組立を東京に於て行ひ、三月廿日にはかしこくも日本瑞典協會總裁であらせらるる秩父宮竝びに妃殿下の御臺臨を仰ぎ、茶室の御見分を戴く光榮に浴したのであつた。當日茶室内には總ての茶器調度が配せられこれ等のものは茶庭の一木一草と共にストックホルムに移されることになつた。

いよいよ四月八日には此の大任と名譽を擔ひ六十三歳の老體を意とせず頭梁浮賀谷徳三郎氏は助手の谷口國男氏を伴ひ、茶室材料を分解し丁重なる荷物としてスエーデンの貨物船M.S.Shantung號に入荷して目出度き鹿島立ちとなつたのである[19]。

この間の事情について小野寺によると、茶室が仮組されたのは東京三田の慶応義塾大学の敷地内であり、当時の日瑞協会総裁の秩父宮殿下によって「瑞暉亭」と命名されたという[20]。ところで、「ビグメスタレン」誌に掲載された図面や写真からは、茶室だけでなく路地や植栽、手水鉢、腰掛など一通りの茶庭がつくられていたことが読み取れるが[21]、上で引用した「茶室瑞暉亭」の記述により、茶室だけでなく茶器調度から茶庭の草木に至るまですべてが日本で用意され、二人の職人とともに船で運ばれたことが裏付けられた。茶人でもあった藤原銀次郎が、本物の日本の茶室の環境を伝えることにこだわりをもって寄贈したことが伺える。

続いて「茶室 瑞暉亭」の記述では、日本の職人とスウェーデンの職人との仕事の様子が紹介されている。少し長くなるが、興味深いので引用しよう。

江戸つ子の頭梁気質な浮賀谷氏は一切洋食は大嫌ひ、往腹八ヶ月間の食料をしこたま持ち込んで、落語の名人小勝匠を彷彿せしめる様な歯切れの良い江戸辨と啖呵に聾唖の旅行を身振り手眞似で解決し四月八日（引用者註―日付は誤りと思われる）無事ゴテブルグ（引用者註―イェーテボリのこと）に到着し一路ストックホルムに向ひ直ちにスエーデン人の大工ミィルソン及び拳闘家上りのオーセの二人を助手として工事に着手した。

最初の程は全然建築工法を異にする瑞典大工は何としても氏の言を入れず、非常に仕事の上に於て困難を生じたそうだが遂には氏の熱心と技術に全く感服し無事竣工を見たのである。就中器用なミィルソンは僅か師事したにも拘らず日本建築に非常な興味を感じ是非とも日本へ同行して修業し度いとの願出に流石に氏も感激し、歸朝に際しては涙で別れる愁嘆場を演じその師弟の情に泣かされたそうである。

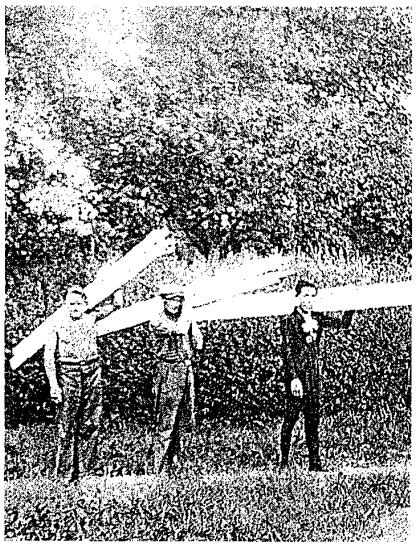
茶室落成式當日には瑞典皇太子殿下の御臺臨を仰ぎ、御挨拶を賜はり剰さへ御説明を申上げる光榮を得たのである。更に氏は日本より所持した仕事道具一式を瑞典側の希望により清く贈呈しこれは永く茶席と共に博物館に蔵せらるることになつたとの事である[22]。

日本とスウェーデンの職人が、互いの文化の違いにとまどいながらも、同じ仕事を共にすることによってやがて強く心を通わせる様子が伺えて興味深い。本物の茶室をストックホルムに建設し、日本の文化を正しく伝えたいと願うイーダ・トローツィと藤原銀次郎の想いは、こうして瑞暉亭として実現し、たしかに文化交流の礎となったのである[23]。

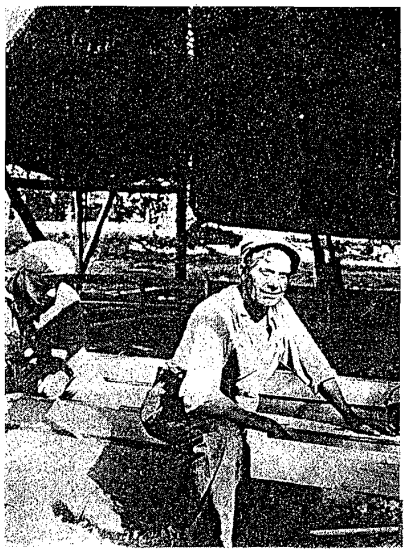
3．「建築世界」誌掲載の瑞暉亭に関する写真

ここでは、「建築世界」第30巻 第１号に掲載された、瑞暉亭の建設の経緯を示す写真を紹介する。

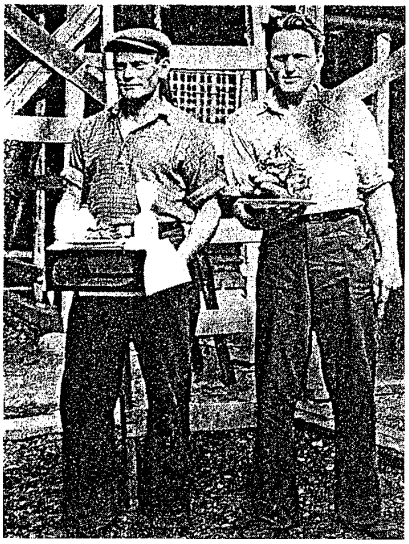
【写真１】日瑞大工の仕事の様子



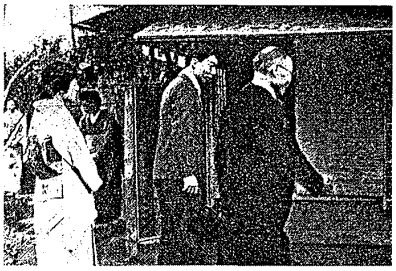
【写真２】日瑞大工の仕事の様子



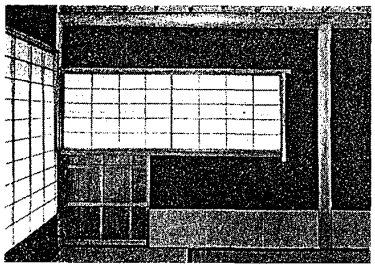
【写真３】スウェーデンの大工の様子



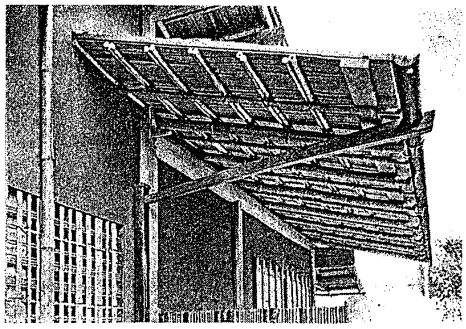
【写真４】上棟式の日のスウェーデンの大工
左がミィルソン、右がオーセ



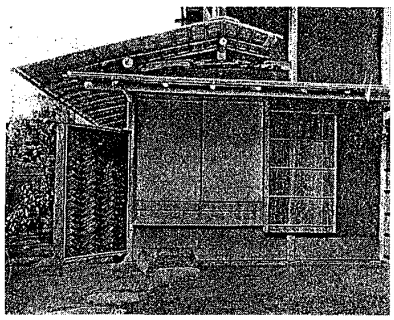
【写真５】秩父宮殿下のご観覧（東京）



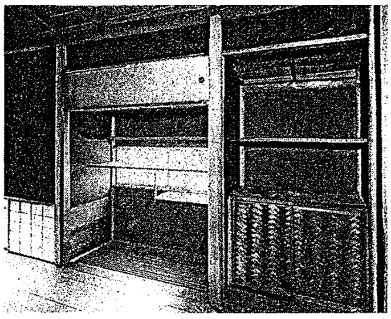
【写真６】瑞暉亭　茶室躙り口



【写真７】瑞暉亭　庇詳細

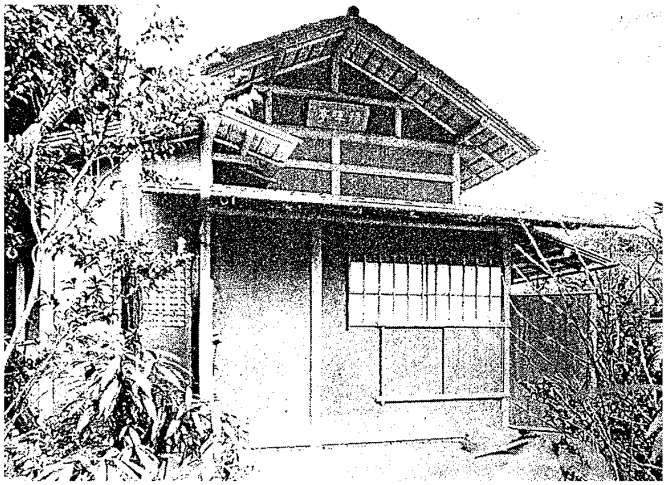


【写真８】瑞暉亭　外観



【写真９】瑞暉亭　水屋

【写真10】瑞暉亭　茶室



【写真11】瑞暉亭　外観

【写真12】スウェーデンにおける作業風景

【写真13】瑞暉亭　額

【写真14】落成式の日にスウェーデン皇太子に挨拶する棟梁浮賀谷氏

【写真15】工事中の瑞暉亭

4．おわりに

本稿では、瑞暉亭の建設の経緯を記す新しく入手した資料をもとに、筆者がこれまで行ってきた研究を進展させた。今後は細部にわたってさらに事実関係を確認することにより、本研究の一つの完成を目標としたい。

註と参考文献

1）川島洋一「瑞暉亭と北欧の近代建築」『建築史論聚』 思文閣出版、pp.524-549、2004.
2）熊倉功夫『近代茶道史の研究』日本放送出版協会、pp.358-359、1980.
熊倉は同書における瑞暉亭の資料として横井夜雨『一亭二碑』を注記しているが、筆者による文献調査では同書の所在をまだ発見できていない。
3）（編集部）「茶室 瑞暉亭」『建築世界』第30巻 第一号、pp.52ff（計５ページ）、1936.
同記事は、編集部による瑞暉亭の解説文１ページ（p.52）とその後に続いて掲載される図版４ページの計５ページからなるが、図版ページにはページ番号が振られず、その間に別の記事の２ページがp.53とp.56として挿入され、次の別の記事がp.57からはじまるというやや特殊な割付がなされている。
4）これらの資料を相互に参照しつつ事実関係を検討するとともに、スウェーデン名の日本語表記、固有名詞の言語表記、当時の職名、年号などについて、整理・加筆・修正を行った。
5）「茶室 瑞暉亭」p.52
6）小野寺百合子『バルト海のほとりの人びと』新評論、pp.12-39、1998.
7）小野寺の著書は学術的な出版物ではなく、また高齢になってからの執筆ではあるが、事実関係の正確な記述に配慮が見られることや、同書からしか得られない貴重な証言を含んでいることから、ここでは他の資料との整合性に注意しつつ参考にする立場をとった。
8）小野寺前掲書、pp.13-17およびpp.35-38
9）副題の「Japanernas teaceremoni」は、「日本人たちの茶の作法」の意。
10）熊倉前掲書、pp.358-359
11）スウェーデン国立民族学博物館ホームページ http://www.etnografiska.se/etnoweb/tehus4.htm
12）熊倉前掲書、p.359
13）小野寺前掲書、p.21
14）熊倉前掲書（p.359）では、藤原が中心となって寄付の会がつくられたとされるが、「茶室 瑞暉亭」では「茶の湯に造詣の深い藤原銀次郎氏は自からの贈物として寄贈する事になつたのである」（「茶室 瑞暉亭」p.52）と藤原一人による寄贈であるように記述されている。ここでは前者の記述を優先する。
15）小野寺前掲書、p.22
16）熊倉前掲書、p.359
17）「茶室 瑞暉亭」、p.52
18）「茶室 瑞暉亭」、p.52
19）「茶室 瑞暉亭」、p.52
20）小野寺前掲書、p.22
21）Helge Zimdahl, ZUI-KI-TEI, *Byggmästaren*, Stockholm, pp.82-94, 1938.
22）「茶室 瑞暉亭」、p.52
23）瑞暉亭が焼失した後、長らく空地となっていた敷地に、新しい瑞暉亭が京都工芸繊維大学と福井工業大学の名誉教授である中村昌生先生により設計され、1990年に竣工した。

謝辞

今井兼介氏には貴重な資料のご提供とご教示をいただいた。心より厚く御礼申し上げたい。

追記

本稿は、平成17-18年度福井工業大学特別研究費を受けて行った研究成果の一部である。記して感謝する。

（平成19年３月30日受理）